掲載日：２０２４年０６月２３日，面名：経済

(C)新潟日報社　無断での転載、改変、複製、頒布を禁止します

時代とともに
にいがた
企業
ヒストリー

海と食卓つなぐ ■2■

新潟冷蔵（新潟市江南区）

地震からの回復早く

同業に先んじて競り導入

1924年、北洋のサケ・マス漁に関連した倉庫業で発足した新潟冷蔵（新潟市江南区）。戦後、事業拡大を図り水産物販売や加工に乗り出していった。ちくわを製造販売した他、イワシを加工してマグロ漁のえさとして売るなど、商機を模索。50年には新潟冷蔵倉庫から現在の社名に変更し、倉庫業から軸足を移していく。

市場での売買に参入したのは53年のことだった。魚市場は現在の新潟市中央区柳島町地区の岸壁にあり、柳島市場と呼ばれていた。戦後の物資不足に伴う水産物の統制が終わると、地元の水揚げ量は増大し、柳島市場は活気にあふれていた。

ただ、既に他の卸売業者が取り仕切っていた市場に割って入るのは簡単ではなかった。狭い売り場を何とか確保し、北海道など県外産地のネットワークを徐々に広げて取り扱いを増やしていった。

県外から調達した水産物は早朝に販売する。一方で高級魚や大量に取れたサバなど、地場の水産物は漁協が夜競りで売り出していた。両方を取り扱うため寝る間もなく激務に追われた担当者は「業界の先頭に立つんだという大きな夢があった」と後に述べている。

市場参入前の50年度に5千万円だった売上高は、63年度に18億円となり大きく伸びた。商品保管のため新たな冷蔵倉庫の建設に着手。高床式で浸水対策を施し、64年3月に完成した。

×　×

同年6月、新潟地震が発生し、柳島市場は状況が一変する。津波が甚大な被害をもたらし、当時の新潟日報朝刊は「柳島一帯が水に浸され、水産物揚げ場の岸壁がくずれ去った」と惨状を伝えている。関連施設は信濃川の水面に向かって倒壊したり、浸水や地下から噴出した土砂で埋没したりし、卸売各社は営業を断念せざるを得なかった。

新潟冷蔵の倉庫や加工場も水没したが、地震の間際に完成した新冷蔵倉庫はかろうじて被害を免れていたことから、いち早く機能を回復することができた。

市場は、突貫工事で建てた施設で10月に仮営業を開始。本格的な再開に向け、現在の新潟市中央区万代島への移転が決まった。新潟市の水産物流通を約30年担った柳島市場は、役目を終えることとなった。

×　×

66年に新たな卸売市場が万代島に開設されると、卸売業者は新潟冷蔵を含む4社が参入した。小売・飲食店に販売する仲卸業者数十社も場内に店を持った。

卸売4社には均等に売り場が割り当てられ、新潟冷蔵には好機となった。現代表取締役会長の坪川篤氏(68)は「水産物の取り扱いでは後発だったが、万代島への市場移転で同じ条件でスタートできる環境に置かれた」と振り返る。さらに翌年には売り場の配置換えがあり、別棟を占有することになる。

67年10月、市場にベルの音が鳴り響いた。新潟冷蔵は広い売り場を武器に、他の卸売業に先んじて競り売りを導入したのだった。

当時、市内では漁協が取引する地場の鮮魚を除き、卸売各社が買い手と話し合って価格、数量を決める相対取引が主流だった。そこに、徐々に価格を下げていく「下げ競り」を取り入れ、県外から集荷した水産物も含め売り出した。

誰がいくらで購入するかをその場で決める仕組みは革新的だった。日々の販売量や種類に応じて、時間や労力をかけずに売りさばいていく。仕入れ値を下回るリスクはあったが「価格が下落しようと全量を売り切る」という方針が評判を呼んだ。買い手が集まり、取扱量も増大。他の卸売業をもけん引し、万代島を全国的にも屈指の市場へと成長させていった。

競り売りを導入した卸売市場＝新潟市中央区万代島

1964年の新潟地震の津波で水没した新潟冷蔵の本社構内＝新潟市中央区入船町４